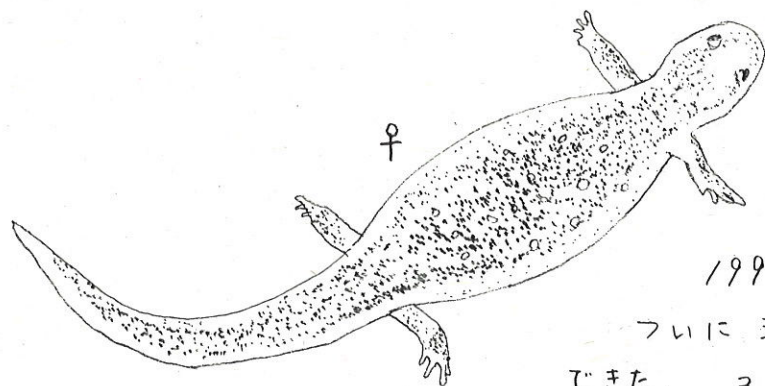


すっかんぽ°

2月号

トウキョウ サンショウウオ

の産卵



1991年2月18日 午後9時30分

ついに決定的瞬間をとらえることができた。3年前から追っていた

トウキョウサンショウウオ（両生類、カエル・イモリの仲間）が集団で産卵する場面に本くわしたのである。約1m²のほんの小さな岩のくぼみに、水がたまっている。その中にライトをあてると、茶色、ぼい色をしたトウキョウサンショウウオの姿がうかびあがった。しかし……想像を絶する数だ。100匹近くはいるだろうか。そして、それらは、数ヶ所でメスをとりかこんで玉のようになり、激しくうごめいている。1匹のメスの胴体を複数のオスが腕でしめつけ、交尾をしようとしているのだ。

メスはこの時期、卵をもっているのではちきれそうなお腹をしている。あまりにすさまじいしめつけのため、失神して、あお向けに横たわっているメスもあるほどである。しかししばらくすると、再びおき上がり、交尾が再開された。

この間、何回、カメラのシャッターが切られただろうか。気がつくともう、フィルムはなくなっていた。

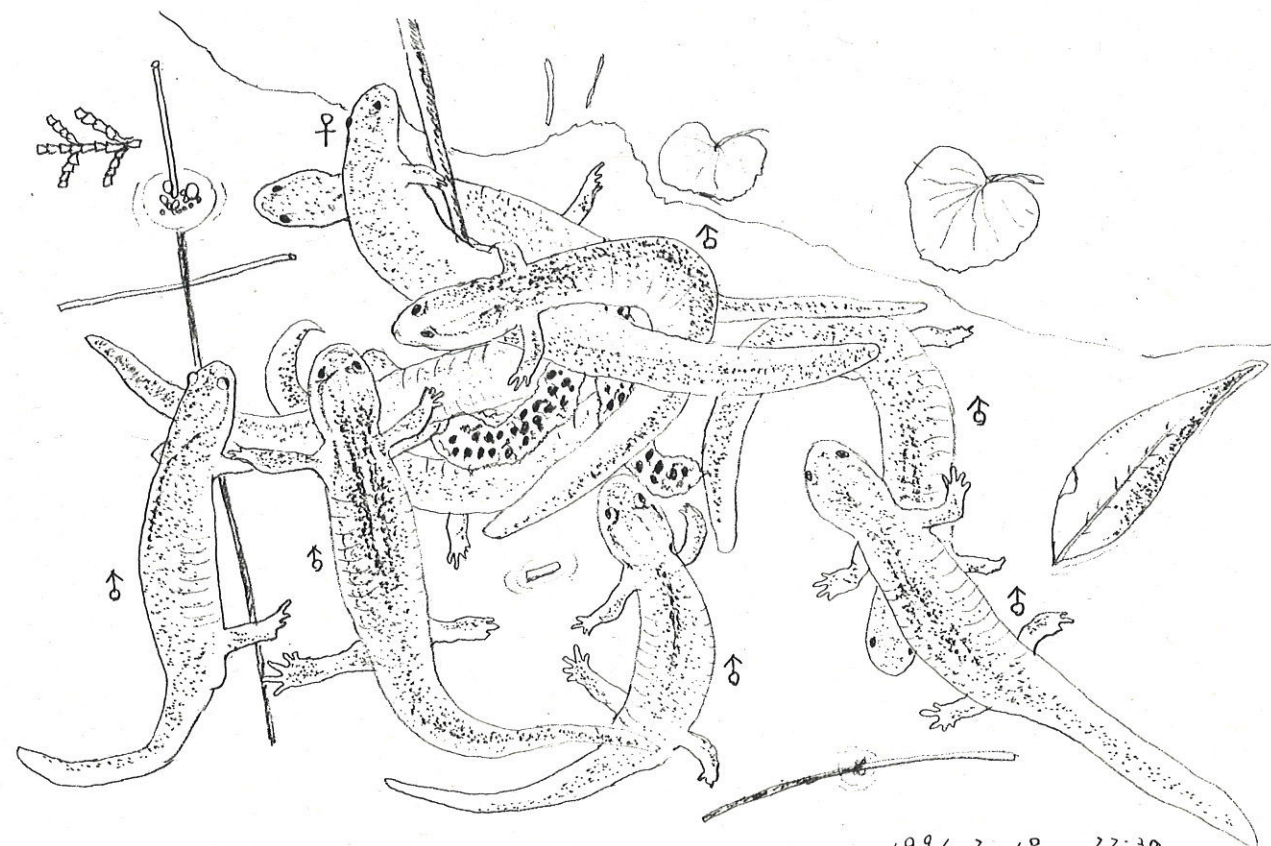
失神している♀



予備のフィルムがなかったので、買いに行くことにしたが、夜の9時すぎである。この産卵地は岩船の奥で、とても近くに、セブン・イレブンなどありそうにない。早くしないと産卵が終わってしまうのではないかと、不安がよぎった。思い切って佐野市内のセブンイレブンまで足をのびし、どしり買い込んでくることにした。しかし、こういう時は、どこかに落とし穴があるものである。案の定、フィルムは本分のお金しかなかった。もとめてみると、時計は10:10分。

いそいで、水たまりをのぞくと、さきと比べて、それほど大きな変化はなかった。現時点で産卵数は、まだ3つ。

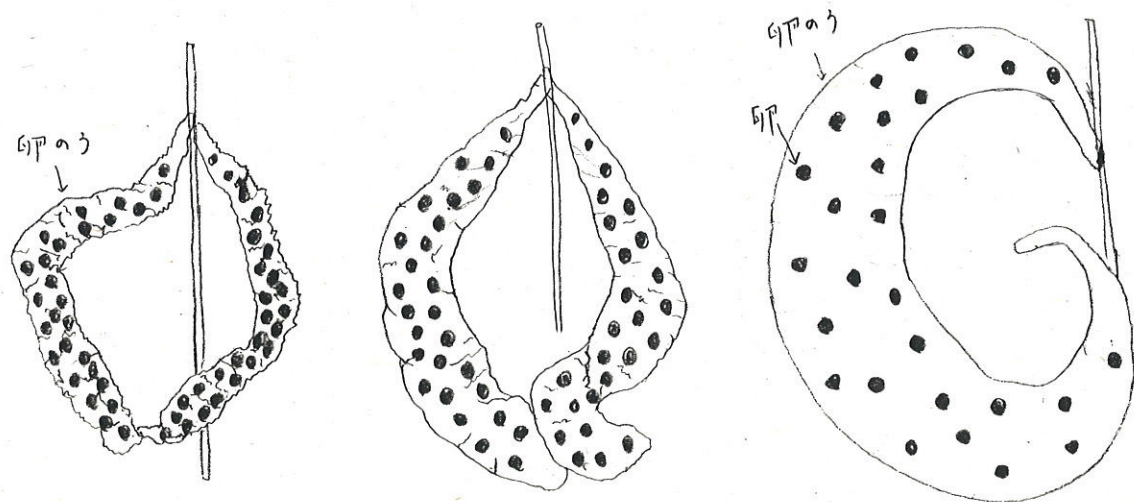
どうやら産卵はこれから本番のようである。念のために、去年、発見した、近くの別の産卵地の様子もみてくることにした。だが、集団産卵どころか、親の姿は一匹もみあたらない。どうやら、場所によって、集団産卵の日時は、違っているらしい。



1991.2.18. 22:30

(写真より模写)

産卵は、一晩中続いていた。翌日の朝になっても、サンショウウオの姿が消えることはなかった。産み出された卵のうは、せうと35対も超えている。ところで、サンショウウオの卵は、三ヶ月型の袋に入って産みつけられている。メスの卵巣は左右一対あるので、それぞれからの卵のうの先端を、岩の表面や、水草の茎などに付着させ、ずるずると引きだすのである。出てきた直後は、ほとんど水を含んでいないので、しわしわで、みず色の蛍光のようなものを発しており、あざやかである。それが、徐々に水を含み、2-3日後には、りっぱな三ヶ月状になる。日本には、約20種のサンショウウオがいるが、種によつて、卵のうの形が違つていて、その形によつて何サンショウウオか判別することが出来る。三ヶ月型は、トウキョウサンショウウオに独特な形である。この袋の中で約1ヶ月、発達が続き、おたまじゃくしになつたところで、袋の一部をとかして、外界へ泳ぎ出てくる。それまでは袋に守られているのだが、それから先には、厳しい戦いが待っているのだ。なにしろ、1m²程度の小さな水たまりである。1対の卵のうから、約50匹のおたまじゃくしが



産卵直後

産卵1日後

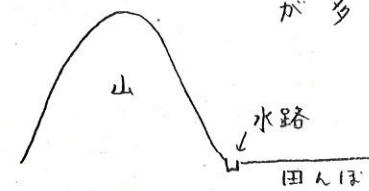
産卵3日後

(片方のみスケッチ)

※ ほぼ同倍率

でてくるとして $50 \times 35 = 1750$ (匹)。それらの中で実際に親になれるのは、せいぜい数十匹である。それ以外は、とも食いのエサになってしまうのだ。他にエサの少ない環境では、重要な食糧源なのだろう。7月ごろまで、池の中であぐら、夏休みごろには、4~5cmの大きさとなり、池から出て、山の中へリフトしていく。そして、果年の2月ごろ、又年目、3年目の親たちにまじりて、小ぶりながらも元気な姿を見せてくれるのである。

★ ところで、トウキョウサンショウウオは、佐野~岩舟~栃木にかけて生息が確認されている。君たちの中にも、三ヶ月型の卵のうを見たことのある人がいると思う。サンショウウオが好んで産卵する場所は、山のふもとの水田の一番山側の水路などが多く、昔の人は、「何だんべこれか?」と



思っていたらしい。つまり、このあたりでは、ごく一般的にみられた、ありふれた生き物だったのである。

ところが、この一年の間に、それまで100個近く産卵していた水路が、又本、フタ付のコンクリート製のものになつてしまつた。サンショウウオにとって、産卵地がなくなることは、その地での絶滅を意味する。ありふれた生き物も、気がついた時にはもういなくなつているのである。そして、この世から消えていった生物は数多い。今、佐渡にしかないトキも、ひと昔前はどこにでもいたありふれた生き物だったらしい。

しかし、トウキョウサンショウウオに関しては、産卵地の地元の人々がそれを守ろうとしている点が大きな救いである。

最後に、君たちにだけわかつてほしいことがある。自然を守るということは、人間以外の生物に特別によいことをしてや、っているわけではないのだ。そういった環境の中で生活できることが人間にとって、最もくらしやすいのである。